

京都教育大学

二〇一九年度 副論文

『源氏物語』玉鬘十帖の教材化に関する研究

教科教育専攻 国語教育専修

田中 郁哉

指導教員 宗雪 修三

指導教員 植山 俊宏

目次

凡例

序章 はじめに

第一章 高等学校古典教科書における『源氏物語』の掲載状況

第二章 『源氏物語』玉鬘十帖概観

第一節 『源氏物語』内における玉鬘十帖の位置と文脈

第二節 梗概

第三章 玉鬘十帖の教材化

第一節 教材化にあたっての基本方針

第二節 教材化する巻、場面

第四章 教材案

終章 おわりに

参考文献一覧

凡例

- 一、『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集 源氏物語③』（小学館 平成八年一月）によった。
- 一、『源氏物語』本文の引用後は『新編日本古典文学全集』の頁数を（ ）内に示した。ただし、第四章においてはこの限りでない。
- 一、『源氏物語』本文に付けられたルビは基本的に外したが、稿者が必要と判断したものに關してはルビを付けた。
- 一、引用は本文から前後二行空けて二字下げで記した。ただし、第四章においてはこの限りでない。
- 一、旧字体は新字体に改めた。
- 一、歴史的仮名遣い、送り仮名や表記の乱れ等は原文を尊重した。

序章 はじめに

『源氏物語』は日本の古典文学作品である。世界初の長編小説とも言われており、日本国内にとどまらず、海外でも高い評価を受けている世界的名著であるといえるだろう。教育現場においても、すべての教科書会社が古文の教材として採用しており、誰しもが一度は触れたことのある作品ではないだろうか。最近では、教科書の定番教材でもある若紫巻の古写本が新たに発見され、巷では「教科書の表記が変わるのではないか」とも噂され話題を集めている。

『源氏物語』には分厚い研究史が存在し、文学研究上の成果は広く認められている。しかし一方で、五十四帖にも及ぶ長編小説であること、表現がやや難解で、内容を正しく理解することが難しいという側面があることも事実である。そのため教科書で部分的に読んだごく一部の場面、例えば桐壺巻冒頭や若紫巻の北山の垣間見場面の内容を断片的に知っているという人が多い一方、『源氏物語』をある程度まとまった分量で、ストーリーとして読んだことがあるという人は案外少ないのではないだろうか。『源氏物語』はきちんとしたストーリーのある長編小説でありながら、大部分の人はそのごく一部の断片的な内容を知っているにすぎないのである。

本研究は『源氏物語』を一つのストーリーとして、原文を通して読み味わうことができる教材を作成することをねらいとしている。しかし『源氏物語』全体の内容をストーリーとして捉えることはその長編性ゆえに学校教育の範囲内では難しく、結局は一部の場面をダイジェスト形式で味わいながら、その間を概括的な説明で補ってしまうことになりかねない。そのため本研究では扱う範囲を玉鬘巻く真木柱巻の所謂玉鬘十帖に絞り、この十帖の内容をストーリーとして深く味わうことで、『源氏物語』の一部を一つのまとまったストーリーとして鑑賞できる教材を作成したい。

この玉鬘十帖は玉鬘という女性が主人公として描かれる巻々の総称であり、具体的には玉鬘巻、初音巻、胡蝶巻、蛭巻、常夏巻、篝火巻、野分巻、行幸巻、藤袴巻、真木柱巻の十帖である。玉鬘十帖は『源氏物語』の一部分ではあるものの非常に独立性の高い巻々であり、玉鬘巻く真木柱巻で一つのストーリーとして完結する。玉鬘十帖はそれ単体でも一つの文学作品として成立するほどの内容となっている。そのため本研究では玉鬘十帖を『源氏物語』内の完結する一つのストーリーとして捉え、巻々の断片的な内容理解にとどまらない、小説性、ストーリー性を味わうことのできる教科書教材を作成してゆく。

第一章 高等学校古典教科書における『源氏物語』の掲載状況

まずは現在発行されている高校古典の教科書のうち、古典 B の教科書を中心に、『源氏物語』の掲載状況を確認した。各教科書は古文編第一部、第二部と分かれているが、多くの教科書会社が第一部では桐壺巻の冒頭と若紫巻の北山の垣間見場面を掲載しており、第一部では会社ごとの違いがあまり見えなかった。そのため、ここでは各教科書会社の古文編第二部を中心に掲載状況を簡潔にまとめ、第一部の掲載巻に関しては（ ）内に示すにとどめておくこととする。なお、古典 B の教科書に限らず、『源氏物語』が比較的多く掲載されているものに関しては、古典 A の教科書であっても確認することにした。以下、各教科書の掲載状況概観である。

- ①第一学習社『高等学校 標準古典 A 物語選』¹⁾
桐壺、夕顔、若紫、葵、須磨、薄雲
- ②第一学習社『高等学校 古典 B 古文編』²⁾
(桐壺、若紫) 須磨、濡標、藤葉裏、御法、橋姫
- ③大修館書店『古典 B 古文編』³⁾
(桐壺、若紫) 葵、須磨、薄雲、若菜上(一)、若菜上(二)、御法、橋姫
- ④明治書院『精選 古典 B 古文編』⁴⁾
(桐壺、若紫) 葵、須磨、野分、若菜上、御法
- ⑤筑摩書房『古典 B 古文編』⁵⁾
(桐壺、若紫) 須磨、薄雲、若菜上、御法
- ⑥数研出版『古典 B 古文編』⁶⁾
(桐壺、若紫) 須磨、藤裏葉、若菜上、御法、浮舟
- ⑦東京書籍『精選古典 B 古文編』⁷⁾
(桐壺、若紫) 葵、須磨、薄雲、御法
- ⑧右文書院『新編古典』⁸⁾ (古典 B)
(桐壺、若紫) 夕顔、葵、須磨、御法

⑨ 桐原書店『古典 B』[※]

(桐壺、若紫) 葵、若菜上、御法、浮舟

⑩ 文英堂『源氏物語・大鏡・評論』[※] (古典 A)

桐壺、夕顔、若紫、明石、玉鬘、蛸、野分、御法、東屋、浮舟、夢の浮橋

各教科書会社によって少しずつ掲載巻は異なるものの、葵巻、須磨巻、若菜上巻、御法巻が人気のようである。『源氏物語』第一部～第二部を中心に、源氏と主要な女性(紫の上、明石君、明石姫君、女三宮)に焦点を当てながら、全体のおおよその流れをつかめるような構成になっていることがわかる。特徴的なのは文英堂『源氏物語・大鏡・評論』であり、こちらは古典 A の教科書ではあるものの、『源氏物語』に焦点を絞ったものとなっており、掲載巻も多い。リード文や解説文がついていないものの、主要な巻はおさえつつも他の教科書が掲載していないような巻も掲載し、他の教科書会社が『源氏物語』第一部～第二部を中心に掲載しているのに対し、本教科書は『源氏物語』全体の中から幅広く掲載しているという特徴がある。もう少し各巻の内容と、学習活動について詳しく見てみようと思う。

全体的に、葵巻、須磨巻、若菜上巻、御法巻は多くの教科書に掲載されている。葵巻は車争いの場面と、六条御息所の生霊の場面が掲載されている。活動については六条御息所の心情の変化を考えるものが多く、例えば車争いの場面では「六条御息所の心情の変化は、どのようなことにより引き起こされているか、考えてみよう」(明治書院)、生霊の場面では六条御息所の歌をもとに「なげきわび…」の歌は、誰のどのような気持ちを述べたものか。」(大修館書店)といった活動が設けられている。

須磨巻はほぼすべての教科書で掲載されており、これは貴種流離譚という『源氏物語』の大きな流れを掴むために掲載されているといえよう。多くの教科書で冒頭が掲載されており、『古今集』「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」(詠み人知らず)と『続古今集』「旅人は袂涼しくなりけり関吹き越ゆる須磨の浦風」(在原行平)の二つの引き歌をもとに、場面の寂寥感を感じ取るような活動が設定されているものが多い。また、若菜上巻は源氏四十の賀、明石女御の出産という源氏の栄華の極りと同時に、女三宮の降嫁による紫の上の苦悩と、柏木による女三宮垣間見という、第二部～第三部の展開に大きくかわる出来事が描かれる巻であり、『源氏物語』全体の流れを掴むのに欠かせない巻と言え、こちらにも多くの教科書に掲載されている。御法巻は紫の上の死が描かれる巻であるが、すべての教科書の第一部で若紫巻が描かれていることを考えると、紫の上という女主人公の登場と退出が教科書内で演出されていると言えるだろう。

確認したすべての教科書にいえることであるが、高校古典の教科書における『源氏物語』の扱いとしては、長編小説である『源氏物語』の重要場面をダイジェスト形式で味いながら、リード文や解説文で巻々の間をつなぐことで『源氏物語』全体のストーリーを大まかに知ることができるという形式になっている。

掲載状況については以上の通りである。次に、どのような学習活動が設けられているのかということをもう少し詳しく確認していきながら、『源氏物語』の学習を通して各社がどのような力を学習者に身に付けさせることをねらいとしているのかということについて考えてみたいと思う。

学習活動は大きく「事実、出来事を理解する」「心情、感情を考える」「和歌を理解、鑑賞する」「表現の特徴や意味を考える」「文法事項を確認し、理解する」の五つに分類できそうである。例えば東京書籍『精選古典 B 古文編』を見てみると、葵巻「車争ひ」に設けられている学習活動は「①葵の上と六条の御息所とが、それぞれ御禊の行列を見物に出かけた動機をまとめよう。」「②双方の牛車の様子について、どのように述べられているか。」「③行列の中の光源氏は、人々の前をどのようにして通ったか。」「④六条の御息所の心情の変化を、物語の展開に即してまとめよう。」となっており、その後ろに語句、文法事項の活動が設けられている。これらの活動のうち②、③は「事実、出来事を理解する」に当てはまるだろう。

①、④は「事実、出来事を理解する」と「心情、感情を考える」の両方に当てはまる。そもそも人物の心情は場面に応じて変化するため、当然ながら場面の状況を理解していないと心情を理解することは不可能である。

特徴的なのが須磨巻の学習活動である。須磨巻の冒頭は引き歌が多く、また須磨の地から都を忍ぶ場面で源氏、良清、民部大輔、前右近将監の四人がそれぞれ歌を詠んだり、源氏が一人で三首の歌を詠んだりと、散文と韻文が調和した印象的な表現が特徴である。そのため同じく東京書籍『精選古典 B 古文編』の活動を見てみると、「①三首の歌それぞれに込められた光源氏の思いについて、まとめよう。」「②四首の唱和の歌に、四人は、それぞれどのような心情を詠み込んでいるか。」という活動があり、続いて「語句と表現」として「①和歌や漢詩が引用されていることにより、どのような効果が生まれているか。」という活動が設けられている。和歌は心の動きを前提に詠まれるものであるため、和歌の鑑賞は当然心情の理解にもつながる。また、散文の中に韻文が入り込むという形のため、表現上の効果も見られる。試しに須磨巻の冒頭を東京書籍『精選古典 B 古文編』から引用してみる。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。

この場面には二首の和歌が引き歌として引用されている。『古今集』「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」（詠み人知らず）と『続古今集』「旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風」（在原行平）であるが、これらの歌が引き歌として用いられることで、音読した際に独特のリズムが生まれていることがわかる。また、これらの意

味を踏まえることで、この場面の理解がより深まる。例えば、「いとどこ心づくしの秋風に」の部分からは引き歌の「月の影見れば」を踏まえることで、月明かりが指している夜であることが想像でき、より「心づくし」、つまりもの思いに気をもむ源氏の寂寥感を深く味わうことができるだろう。また、「関吹き越ゆると言ひけむ浦波」の歌も引き歌の「旅人」「袂涼しくなりにけり」「関吹き越ゆる」を踏まえると、須磨という遠い地まで旅をしてきた源氏一行に吹く風は関を越えてくるほど遠いところから、しかし強く吹く風であり、袂が涼しく感じるような肌寒い秋の風であることが想像できる。背景に隠れている歌の内容や詠まれた情景を踏まえることで、短くりズムの良い文章でありながら、豊かな情景と心情を味わうことができる。また、本文の「夜々」は「寄る寄る」との掛詞にもなっており、散文でありながら韻文のような独特の表現も導き出されている。これも先に二つの引き歌が用いられていることに起因しており、この段落全体が一つの和歌になっているような、独特の味わいを持つ表現が用いられていることがわかる。

このような表現は古文ならではのものであり、昔の日本語の響きの美しさや、韻文と散文の調和を味わうことのできる表現であるといえる。教材化にあたっては、このような古文独特の表現を味わえるような場面も取り入れたい。

第二章 『源氏物語』 玉鬘十帖の概要

第一節 『源氏物語』内における玉鬘十帖の位置と文脈

今回私が扱おうと考えているのは、玉鬘巻、初音巻、胡蝶巻、蛩巻、常夏巻、篝火巻、野分巻、行幸巻、藤袴巻、真木柱巻の十帖からなる、所謂玉鬘十帖と呼ばれる巻々である。『源氏物語』第一部にあたる巻々であり、少女巻と梅枝巻の間に位置する。

須磨の地から源氏が帰京後、濡標巻で朱雀帝が讓位、冷泉帝の御代となることで内大臣に昇進し、源氏一族に春が訪れる。絵合巻で六条御息所の遺児、前斎宮を引き取った源氏は冷泉帝に入内させ、前斎宮は梅壺女御と呼ばれるようになる。冷泉帝後宮には既に権中納言（もと頭中将）の娘である弘徽殿女御がおり、帝寵を競い合うこととなる。その後少女巻で梅壺女御が立后、秋好中宮となり、源氏は太政大臣へ昇格、権中納言は内大臣（以後、本論文ではこの呼称で統一する）に昇格する。同じく少女巻で源氏が造営していた六条院が完成し、紫の上、花散里、秋好中宮、明石姫君を迎え入れ、源氏の栄華は絶頂を極める。このように源氏の栄華が絶頂に達した少女巻が終わると突如舞台は筑紫へと移り、玉鬘十帖が始まる。

少女巻までの『源氏物語』は、源氏が栄華を極めていくまでの過程を描いたものであった。そしてそれは同時に源氏のかつての良き友であり、今はライバルでもある内大臣との政権争いの過程でもあった。少女巻で源氏側の梅壺女御が立后し、秋好中宮となったことで政権争いは源氏の勝利に終わり、源氏が栄華を極めることとなった。

玉鬘十帖の女主人公である玉鬘は、内大臣と夕顔の遺児であった。帚木巻の雨夜の品定めで内大臣の口からその存在が語られ、夕顔巻でも夕顔の侍女右近の口からその存在が語られていた。

夕顔巻で内大臣のもと愛人である夕顔と関係を持った源氏であったが、廃院に連れ出されたところ夜半に物の怪が表れ、夕顔を取り殺してしまう。この夕顔怪死の一件は侍女の右近とともに秘密とした源氏であったが、夕顔のことが忘れられず、その遺児（玉鬘）を引き取って養育したいと考える。しかし遺児は夕顔の西の京の乳母の一家（右近の家とは異なる）のもとに預けられており、夕顔怪死の件を秘密にしている手前、西の京の乳母一家と接触することはできず、そのまま遺児の行方も分からなくなっていた。源氏はものの折に夕顔とその遺児のことを思い出すものの、行方が分からないまま少女巻まで物語は進むこととなる。

玉鬘十帖はこのような文脈のもと語り出さる。玉鬘は源氏にとって「夕顔のゆかり」であり、さらに政敵内大臣の実子でもある。玉鬘は『源氏物語』の文脈においてこのような立場にある。次に、玉鬘十帖の梗概を巻ごとに確認したいと思う。

第二節 梗概

夕顔の死を知らぬまま玉鬘を預かっていた西の京の乳母一家であったが、乳母の夫が太宰少弐に任官されたことに伴って、玉鬘を連れて筑紫に下り沈淪の生活を送っていた。玉鬘四歳の時である。乳母一族はなんとかして玉鬘を帰京させようと考えていたものの、太宰少弐の任期が終わっても帰京が叶わず、少弐は筑紫の地で死んでしまう。

二十歳になり美しく成長した玉鬘には求婚者が多く、中でも肥前の豪族、大夫監が強引に玉鬘に結婚を迫り、恐ろしくなった乳母一族は覚悟を決め、玉鬘を連れて舟で京まで逃げた。帰京後、椿市でかつての夕顔の侍女右近と再会する。夕顔亡き後、紫の上付きの女房として源氏の基で過ごしていた右近は源氏に玉鬘発見の事情を報告し、源氏は玉鬘を六条院に引き取ることを決める。玉鬘は表向き源氏の実子として源氏に引き取られ、六条院に出入りする好き者たちの気を揉ませる娘として、源氏に養育されることとなった。（玉鬘巻）

元旦、六条院は春を迎える。新たに引き取られた娘玉鬘の噂が世間に広まり、源氏の思惑通り、玉鬘に心をかける男君は多い。（初音巻）

三月下旬、衣更えの季節となり、玉鬘のもとに多くの求婚者から懸想の手紙が届く。中でも源氏の異母弟の兵部卿宮、髭黒大將がとりわけ熱心であり、玉鬘を実の姉と知らない異母弟の柏木も玉鬘に懸想を掛け、恋愛に慣れていない玉鬘は数々の男君の求婚に思い悩む。源氏は求婚者たちの手紙を見ながら、玉鬘に返事を促したり、返事上の注意をしたりするが、玉鬘は乗り気にならない。そうしているうちに源氏自身までもが玉鬘の美しさに惹かれてゆき、養女として養育しているのにも関わらず、玉鬘の手を取り恋情を訴えてしまう。多くの求婚者から懸想を受けるのみならず、養父源氏からも恋情を訴えられ、玉鬘はますます苦しい思いをすることとなる。（胡蝶巻）

五月雨の候、玉鬘を恋い忍んでやってきた求婚者の兵部卿宮は、源氏の放った螢の光により玉鬘の美しい姿を目の当たりにし、ますます思いを掻き立てられる。またある夜には、源氏は玉鬘に物語の功罪を語る。（螢巻）

夏のある夜、源氏は和琴を引いて玉鬘に教える。篝火に映る玉鬘の姿は大変美しい。源氏は玉鬘を兵部卿宮か髭黒大將に嫁がせて親の立場を堅持しようと思う一方、玉鬘に対する愛着は募る一方である。玉鬘も徐々に源氏に慣れ親しみ始める。源氏は、兵部卿宮か髭黒と結婚させて玉鬘を六条院に置きつつ、親子という形のままものの折に関係を持つとうかと考える。（常夏巻）

初秋の夜、玉鬘と源氏は和琴を枕に添い寝しつつ、歌の贈答を交わす。（篝火）

秋、六条院に野分が訪れる。六条院を見舞った夕霧は、そこで紫の上の姿と、源氏に寄りかかる玉鬘の姿を垣間見て不審に思う。（野分巻）

十二月、大原野の行幸が行われ、玉鬘は冷泉帝の姿を拝見し、その美しさを目の当たりにする。源氏は玉鬘に尚侍出仕を勧めるが、玉鬘は乗り気でない。尚侍出仕にしても結婚にし

ても、ともかく玉鬘の出自を明らかにしなければならぬと考えた源氏は内大臣に事の真相を打ち明け、玉鬘の裳着を挙行した。腰結役は内大臣が務めた。（行幸卷）

尚侍出仕をしきりに勧められる玉鬘は、帝寵を競って中宮や女御と軋轢が起きることを恐れて気乗りしない。しかし実父に迎えられることもなく、源氏から懸想を受け続けるという状態も改善せず、苦悩する。

十月に玉鬘が尚侍として出仕することが決まった。多くの求婚者は出仕前に玉鬘を手に入れようと、玉鬘に手紙を送る。玉鬘は兵部卿宮にのみ、返事をする。（藤袴卷）

侍女弁のおもとと謀りによって、髭黒大將が玉鬘を強引に手に入れた。玉鬘は自身の境遇に涙を流し、髭黒大將にも打ち解けない。髭黒大將は玉鬘を自邸に引き取り、玉鬘は自宅勤務という形で尚侍として出仕する。髭黒には北の方がいたが、玉鬘を寵愛する髭黒に北の方は煩悶し、数年来しばしば起き、夫婦疎遠の原因ともなっていた精神の発作を起こす。事情を知った北の方の父親は激怒し、北の方とその娘たちを自邸に引き取る。この北の方の父親というのが紫の上の父でもある式部卿宮であり、髭黒の北の方は紫の上の異母姉妹なのであった。玉鬘は源氏恋しさに手紙のやり取りをしていたものの、翌年十一月には男子を出産したため、このまま参内することなく終わってしまいそうである。（真木柱卷）

第三章 玉鬘十帖の教材化

第一節 教材化にあたっての基本方針

現在各教科書会社が出版している教科書の『源氏物語』掲載状況については、主要な巻の主要な場面を味わいながら『源氏物語』全体のストーリーを大まかに理解できるという構成になっている。今回私が試みたいのは、『源氏物語』の玉鬘十帖のみに焦点を当てて教材化することである。玉鬘十帖はもちろん『源氏物語』の一部であり、『源氏物語』全体の中での位置づけを意識しながら鑑賞することが理想であるが、一方で玉鬘十帖は、姫君玉鬘とその周囲の人々を描いた巻々でもあり、それ単体でも一つの独立した作品となり得るほど、『源氏物語』内でも独立性の高いものであることも事実である。またそれだけではなく、貴種流離や王権志向、源氏の色好み、女性の苦悩など、『源氏物語』を構成する要素は玉鬘十帖にももちろん見られる。そのため、『源氏物語』全体ではなく、玉鬘十帖のみに焦点を当て、主人公玉鬘の半生を追う形で学習できるような教材を作成したい。

教材化にあたっては、玉鬘の半生が追えるように、玉鬘十帖全体から広くとれるようにしたい。玉鬘十帖の大きなテーマとして、源氏の養女に対する恋と、それを受ける玉鬘の苦悩が挙げられる。特に玉鬘の苦悩は、玉鬘十帖を一貫して描かれており、玉鬘は苦悩する女君として描かれている。そのため、教材化にあたっては特に玉鬘の心情がよく表れている部分を中心に採用したい。

また、玉鬘十帖にとどまらず『源氏物語』以外の他作品とも関連付けながら教材を作成していきたい。例えば玉鬘の筑紫流離にあたっては、都以外の様子が描かれている他の古典文学作品『伊勢物語』や『土佐日記』、『更級日記』等を取り入れつつ、それらと比較して詠み比べができるような視点を紹介したい。また、玉鬘の流離については例えば貴種流離譚の観点から、『竹取物語』との比較も可能である。『源氏物語』のみにとどまらない幅広い視点から玉鬘十帖を読めるような教材配置を心掛けたい。

また、玉鬘十帖のうち初音巻、行幸巻は一年の春夏秋冬の巡りを描いている。『源氏物語』における季節表現を味わえる巻々となっているため、コラムとして、春夏秋冬それぞれの季節描写が味わえるような教材を作成したい。

第二節 教材化する巻、場面

ここでは実際に教材化する巻の該当場面を引用し、その場面の概要、ねらいを示していく。なお、本文の引用に当たっては『新編日本古典文学全集 源氏物語③』²⁾を用い、末尾に頁数を示した。

A 「乳母一族の献身——玉鬘巻——」

少貳、任はてて上りなむとするに、遙けきほどに、ことなる勢ひなき人はたゆたひつつ、すがすがしくも出で立たぬほどに、重き病して、死なむとする心地にも、この君の十ばかりなりたまへるさまのゆゆしきまでをかしげなるを見たてまつりて、^{少貳}「我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむとすらん。あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、何時しかも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまかせて見たてまつらむにも、都は広き所なれば、いと心やすかるべしと思ひいそぎつるを、ここながら命たへずなりぬること」とうしろめたがる。男子三人あるに、^{少貳}ただこの姫君京に率てたてまつるべきことを思へ。わが身の孝をば、な思ひそ」となむ言ひおきける。

中略

二郎が語らひとられたるも、いと恐ろしく心憂くて、この豊後介をせむれば、いかかは仕うまつるべからむ、語らひあはすべき人もなし、まれまれの兄弟には、この監に同じ心ならずとて仲違ひにたり、この監にあたまれては、いささかの身じろぎせむも、ところせくなむあるべき、なかなかなる目をや見む、と思ひわづらひにたれど、姫君の人知れず思いたるさまのいと心苦しくて、生きたらじと思ひ沈みたまへる、ことわりとおぼゆれば、いみじきことを思ひ構へて出で立つ。姉妹たちも、年ごろ経ぬるよるべを棄てて、この御供に出で立つ。あてきといひしは、今は兵部の君といふぞ、添ひて夜逃げ出でて舟に乗りける。大夫監は、肥後に帰り行きて、四月二十日のほどに日取りて来むとするほどに、かくて逃ぐるなりけり。(九一・九九)

玉鬘を何としても上京させようとする乳母一族の献身的な様子が読み取れる場面である。前半場面は太宰少貳の遺言が中心となっており、自分の追善供養ではなく、姫君玉鬘を上京させることを息子たちに伝える。自分の命よりも玉鬘の幸せを優先する太宰少貳の気持ちに気づかせたい。

後半部分は大夫監の求婚から逃れるため、筑紫の家族を捨ててまで上京を決意する豊後介の様子が中心に描かれている。豊後介の心情の変化は、玉鬘が人知れず思い悩んでいる様

子を豊後介が見たことがきっかけとなっている。先の場面でも、太宰少弐の遺言は玉鬘の美しさを少弐が認識した直後に語られていた。自身の生活を犠牲にしてまで、主人である玉鬘の幸せのために奔走する乳母一族の様子に触れることで、古代のみやびな文学が実はそうした脇役たちの支えによって成り立っているのだということに気づかせ、古典を読む際の視野を広げられるような学習活動を考えたい。

B 「源氏の恋情——胡蝶巻——」

源氏 「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりこそあれ。あはれなるわざなりけり。中将の、さらに昔ざまのほひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もものしたまうけるよ」とて涙ぐみたまへり。箱の蓋なる御くだものの中に、橘のあるをまさぐりて、

源氏

「橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおもほへぬかな

世ととももの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」とて、御手をとらへたまへれば、女かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてもものしたまふ。

玉鬘

袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつかしう、手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり肌つきのこまやかにうつくしげなるに、なかなかなるもの思ひ添ふ心地したまうて、今日はすこし思ふこと聞こえ知らせたまひける。女は心憂く、いかにせむとおぼえて、わななかるる気色もしるけれど、源氏 「何か、かく疎ましとは思いたる。いとよくもて隠して、人に咎めらるべくもあらぬ心のほどぞ。さりげなくてをもて隠したまへ。浅くも思ひきこえさせぬ心ざしに、また添ふべければ、世にたぐひあるまじき心地なんするを。このおとづれきこゆる人々には、思しおとすべくやはある。いとかう深き心ある人は世にありがたかるべきわざなれば、うしろめたくのみこそ」とのたまふ。いとさかしらなる御親心なりかし。(一八五・一八七)

胡蝶巻、源氏が玉鬘に恋情を訴える場面である。玉鬘十帖の主題とも言つてよい玉鬘の苦悩は、この養父からの懸想という矛盾した自身の境遇が大部分を占めている。玉鬘の半生を追っていくためには外すことのできない場面と言えるだろう。

源氏はかつての愛人夕顔追想をすり替える形で玉鬘に恋情を訴えかける。このように、故人を偲ぶ体から恋愛に話題をすり替えて思いを訴えるという方法は、例えば『和泉式部日記』で、為尊親王を偲ぶ体で和泉式部に手紙を送りながらも、すぐさま恋愛へと発展させていこ

うとする敦道親王の姿勢にも見られるものである。源氏のけしからぬあだ心からきたものというよりは、古代文学の恋愛の型の一つと見てよいものだろう。そうした内容を紹介できるように解説文を入れたい。

源氏から懸想を訴えられた玉鬘の反応は、「いとうたて」「むつかし」「いと心憂し」など、短いながらも強い語調でその不快感が描かれている。そうした不快感をできるだけ抑え、表に出さないようにしながらも、隠しきれずに手足が震えてしまう玉鬘の様子が描かれている。大夫監の強引な求婚から命からがら逃げだしてきたのにもかかわらず、その後六条院で養父である源氏から懸想を受けるといふ玉鬘の境遇を踏まえながら、このときの玉鬘の思い、心情を考えさせたい。特にここでは源氏と玉鬘の和歌の贈答が描かれているので、和歌を中心としながら双方の思いを考える活動を設けたいと思う。また、最後に「いとさかしらなる御親心なりかし」という草子地があるが、この草子地の意味を考えることで、養父の養女に対する恋という玉鬘十帖のテーマの特異さに気づかせたい。

C 「蛍の光——蛍巻——」

何くれと言長き御答へ聞こえたまふこともなく思しやすらふに、寄りたまひて、御几帳の帷子を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあきれたり。蛍を薄きかたに、この夕つ方いと多くつつみおきて、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくろふやうにて。にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目いとをかしげなり。

中略

宮は、人のおはするほど、さばかりと推しはかりたまふが、すこしけ近きけはひするに、御心ときめきせられたまひて、えならぬ羅の帷子の隙より見入れたまへるに、一間ばかり隔てたる見わたしに、かくおぼえなき光のうちほのめくをかしと見たまふ。ほどもなく紛らわして隠しつ。されどほのかなる光、艶なることのつまにもしつべく見ゆ。ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のをかしかりつるを飽かず思して、げにこのこと御心にしみにけり。

螢宮 「なく声もきこえぬ虫の思ひだに人の消つにはきゆるものかは

思ひ知りたまひぬや」と聞こえたまふ。かやうの御返しを、思ひまはさむもねぢたければ、疾きばかりをぞ、

玉鬘 声はせで身をのみこがす蛍こそいふよりまさる思ひなるらめ

など、はかなく聞こえなして、御みづからはひき入りたまひにければ、いとはるかにもてなしたまふ愁はしさを、いみじく恨みきこえたまふ。(一九九・二〇一頁)

蛍巻、源氏が蛍を放った光で玉鬘の美しい姿を目にした兵部卿宮が、玉鬘と和歌の贈答を

交わす場面である。螢の光によって玉鬘の姿を兵部卿に見せるといふ源氏の洒落た趣向が印象的であり、掛詞を用いて場面に合った兵部卿宮の歌、それを踏まえつつも緩やかに兵部卿宮の思いを退ける、和歌の贈答の型に見事に当てはまった玉鬘の返歌を味わうことのできる場面である。「されどほのかなる光、艶なることのつまにもしつべく見ゆ」という草子地が何を表しているのか、二人の和歌の内容はどのようなものかということを考えてみながら、玉鬘が源氏、兵部卿宮からの懸想に困惑し、二人を遠ざけようとしていることに気づかせたい。

D 「大原野の行幸——行幸巻——」

西の対の姫君も立ち出でたまへり。そこばくいどみ尽くしたまへる人のありさま見たまふに、帝の、赤色の御衣奉りてうるはしう動きなき御かたはら目に、なずらひきこゆべき人なし。わが父大臣を、人知れず目をつけたてまつりたまへど、きらきらしうものきよげに盛りにはものしたまへど、限りありかし。いと人にすぐれたるただ人に見えて、御輿の中よりほかに、目移るべくもあらず。まして、容貌ありや、をかしやなど、若き御達の消えかへり心移す中少将、何くれの殿上人やうの人は、何にもあらず消えわたれるは、さらにたぐひなうおはしますなりけり。源氏の大臣の御顔さまは、別物とも見えたまはぬを、思ひなしのいますこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。さは、かかるたぐひはおはしがたかりけり。あてなる人は、みなものきよげにけはひことなべいのものとのみ、大臣、中將などの御にほひに目馴れたまへるを、出で消えどものかたはなるにやあらむ、同じ目鼻とも見えず、口惜しうぞ庄されたるや。兵部卿宮もおはす。右大将の、さばかり重りかによしめくも、今日の装ひいとなまめきて、胡籙など負ひて仕うまつりたまへり、色黒く髭がちに見えて、いと心づきなし。いかでかはつくるひたてたる顔の色あひには似たらむ、いとわりなきことを、若き御心地には見おとしたまうてけり。大臣の君の思しよりてのたまふことを、いかがはあらむ、宮仕は心にもあらで見苦しきありさまにや、と思ひつつみたまふを、馴れ馴れしき筋などをばもて離れて、おほかたに仕うまつり御覧ぜられんは、をかしうもありなむかしと思ひよりたまうける。(二八九・二九二)

大原野の行幸、玉鬘が冷泉帝、源氏、内大臣、兵部卿宮、髭黒等の男性たちの様子を見る場面である。ここでは、それぞれの男性たちがどのように描き分けられているのかということを読み取らせ、玉鬘がそれぞれの男性をどう評価しているのかということを考えさせた。また、尚侍出仕に乗り気でなかった玉鬘であったが、この行幸を見たことをきっかけにして尚侍出仕の方向に心が動き始める。これは冷泉帝の美しさを目の当たりにしたことが原因と読むことができるため、そうした玉鬘の心境の変化にも注目させたい。

次章からは具体的な教材案を示す。なお、本文は必要に応じて「」を付けたり、ルビを振ったりなどして一部改変した。

第四章 教材案

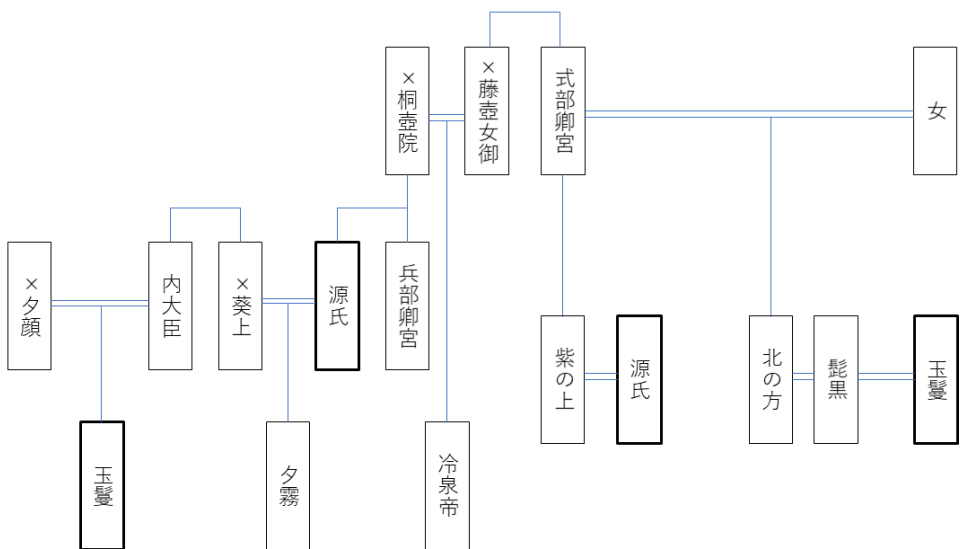
『源氏物語』 玉鬘十帖を読む

「玉鬘十帖」とは、『源氏物語』の玉鬘巻、初音巻、胡蝶巻、蛩巻、常夏巻、篝火巻、野分巻、行幸巻、藤袴巻、真木柱巻の十帖の総称のことです。この玉鬘十帖は**玉鬘**という姫君を中心とした物語が描かれています。玉鬘がどのような半生を送ったのか、玉鬘十帖を読みながらその数奇な人生を味わってみましょう。

〈あらすじ〉

源氏には十七歳の頃、夕顔という恋人がいた。光源氏は夕顔の素性を知らぬまま何度か逢っていた。ある夜、光源氏とある廃院に夕顔を連れ出したところ、廃院にいる物の怪に取りつかれてしまい、夕顔は急死してしまった。悲しみに暮れた光源氏は、夕顔の侍女である右近から夕顔の素性を聞くこととなる。実は夕顔は実は頭中将の妻であった。この頭中将は源氏の従兄であり、義兄であり、親友であり、良きライバルでもあった。そして頭中将と夕顔との間には幼い娘があり、その娘は寂れた西の京で両親とは離れ、夕顔の乳母に養育されているようである。夕顔の死を公にできない光源氏は、事情を知っている右近を自分のもとに引き取って口止めをし、同時に夕顔の娘を形見として引き取りたいと考えた。しかし娘は西の京にあり、夕顔の死を隠している手前源氏は西の京の乳母と接触もできず、そのまま時が流れた。この夕顔の娘こそが、玉鬘である。(夕顔巻)

玉鬘十帖人物関係略図



乳母一族の献身——玉鬘巻——

西の京で玉鬘を養育していた夕顔の乳母一家は夕顔怪死の事情を知らず、夕顔の行方も分からなくなってしまう。そして玉鬘が三歳になる年、乳母の夫が太宰少貳に任命され、その筑紫任官に伴って玉鬘を連れて筑紫へと下ってしまった。

玉鬘は筑紫で心細い生活を送りながらも、驚くほど美しく成長した。そして乳母の夫である太宰少貳もその任期が終わり、ようやく乳母一団は都へ戻ることができそうである。

①少貳、任はてて上りなむとするに、遙けきほどに、こ

となる勢ひなき人は②たゆたひつつ、すがすがしくも出で

立たぬほどに、重き病して、死なむとする心地にも、③こ

の君の十ばかりなりたまへるさまのゆゆしきまでをかし

げなるを見たてまつりて、少貳「我さへうち棄てたてまつ

りて、④いかなるさまにはふれたまはむとすらん。あやし

き所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、

何時しかも京に率てたてまつりて、⑤さるべき人にも知ら

せたてまつりて、⑥御宿世にまかせて見たてまつらむにも、

都は広き所なれば、いと心やすかるべしと思ひいそぎつ

るを、ここながら命たへずなりぬること」とうしろめた

がる。男子三人あるに、少貳「ただこの姫君京に率てたて

まつるべきことを思へ。わが身の孝をば、な思ひそ」と

なむ言ひおきける。

①少貳 母夕顔の乳母の夫。

乳母の夫が太宰府の次官

(少貳)に任命されたため、

玉鬘もそれに伴って筑紫へ

下ったのである。その任期

五年が終わって

②たゆたひつつ ためらつ

て

③この君 玉鬘

④いかなるさまにはふれた

まはむとすらん どのよう

な様子で見捨てられさまよ

いなさるだろうか

⑤さるべき人 しかるべき

人。ここでは玉鬘の肉親で

ある頭中将と夕顔のことを

指す

⑥御宿世 前世からの運命

少弐が亡くなった後も、乳母一族はなかなか上京できずにいた。そのうちに玉鬘は美しく成長し、その美貌を噂に聞きつけた肥後の国（今の熊本県）の豪族である大夫監が玉鬘に強引に求婚し、少弐の息子三人のうち次男と三男は大夫監の側に味方してしまった。玉鬘が地方の豪族と結婚し、一生筑紫で暮らすことになりかねないことを憂慮した乳母一族は、ついに上京を決心する。

二郎が①語らひとられたるも、②いと恐ろしく心憂くて、

この③豊後介をせむれば、ぶんこのすけ 豊後介「いかがは仕うまつるべか

らむ、語らひあはすべき人もなし、まれまれの兄弟には、

この監に同じ心ならずとて仲違ひにたり、この監に④あた

まれては、いささかの身じろぎせむも、ところせくなむ

あるべき、なかなかなる目をや見む」と思ひわづらひに

たれど、姫君の人知れず思いたるさまのいと心苦しくて、

生きたらじと思ひ沈みたまへる、ことわりとおぼゆれば、

いみじきことを思ひ構へて出で立つ。⑤姉妹たちも、年ご

ろ経ぬるよるべを棄てて、この御供に出で立つ。⑥あてき

といひしは、今は兵部の君といふぞ、添ひて夜逃げ出で

て舟に乗りける。大夫監は、肥後に帰り行きて、四月二

十日のほどに日取りて来むとするほどに、かくて逃ぐる

なりけり。

①かたらひとられたる
（大夫監に）言いくるめら
れてしまった

②いと恐ろしく心憂くて
乳母の思い

③豊後介 乳母の長男。三
人息子のなかで豊後介だけ
は大夫監に味方しなかった。

④あたまれては 敵視され
ては

⑤姉妹たちも、年ごろ経ぬ
るよるべを棄てて 豊後介
もその姉妹も筑紫に家庭を
持っていたが、それを筑紫
に置いたまま

⑥あてきといひしは、今は
兵部の君といふぞ 幼名を
あてきといった娘は、今は
兵部の君と言うが

学習のてびき

- 一、15pの少弐の発言からは、少弐のどのような思いを読み取ることができるだろうか。
- 二、16p豊後介の心情の変化と、その理由についてまとめよう。
- 三、本文では上京が「いみじき事」や「逃ぐる」と表現されています。このような表現の持つ効果について考えてみよう。
- 四、乳母一族のそれぞれの人物の行動、発言を整理し、感じたことや考えたことを話し合ってみよう。

語句と文法

- 一、「我さへうち棄てたてまつりて」を「さへ」の意味に注意しながら現代語訳してみよう。
- 二、「わが身の孝をば、な思ひそ」を現代語訳してみよう。

〈コラム〉筑紫流離

『源氏物語』は平安時代の作品ですが、平安時代という宮中の優美な世界を描いた作品ばかりだと思いきや、浮かべる人も多いのではないだろうか、実はそうではなく、都の外の世界も古典文学作品には多く登場します。有名な『伊勢物語』第九段「東下り」では京→三河国（現在の愛知県）→駿河国（現在の静岡県）と旅し、最終的に隅田川（現在の東京都）で歌を詠んでいましたね。他にも『土佐日記』や『更級日記』の登場人物も旅をしています。平安時代、都の外がどのように描かれていたのかということを経験的な作品を通して読み比べてみると、面白い発見があるかもしれませんね。

〈コラム〉流離する姫君

玉鬘は頭中将の娘というそれなりに高い身分に生まれながら、筑紫へと下って心もとない生活を送ります。このことから玉鬘は**流離する姫君**と呼ばれることも多いです。同じように流離する姫君といえば、『竹取物語』のかぐや姫が有名ですね。かぐや姫は月で罪を犯し、その罪を償うために地上へと下ろされ、そこで様々な試練を乗り越えて再び月へと帰って行きます。このように、流離には過酷な試練が伴います。このように、高貴なもとに生まれた人（貴種）が何らかの原因で他郷へと流離し、そこでの試練を乗り越え、成長してラストを迎えるという形の物語を**貴種流離譚**とよびます。玉鬘の筑紫流離には、この貴種流離譚の影響がありそうですね。

ちなみに、この貴種流離譚は形を変えながらも現代の文学作品や映画作品などにも見られます。皆さんの身近な作品の中にも貴種流離譚が見られないか、探してみましよう。

「源氏の恋情——胡蝶巻——」

命からがら上京を果たした玉鬘一行は、長谷寺で今は源氏のもとにいる夕顔の侍女右近と再会した。右近は玉鬘一行に夕顔怪死の件を話し、そして玉鬘は源氏のもとに引き取られることとなるが、実の親を恋しく思う玉鬘は、赤の他人である源氏に引き取られることを不満に思う。

かつての恋人夕顔の形見として玉鬘を引き取った源氏であったが、その美しさに驚き、玉鬘を表向きには実子として扱いながら、玉鬘の美しさに惹かれて求婚をしてくる男たちの様子を見て楽しもうと考える。初めは玉鬘を実子のように大切に養育していた源氏であったが、次第に源氏自身までもが玉鬘の美しさに惹かれていくことになる。ある日、玉鬘の様子がかつての恋人夕顔と重なって見えた源氏は、ついに玉鬘に自身の恋情を訴えかけてしまう。

源氏「見そめたてまつりしは、①いとかうしもおぼえたまは

ずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるを

りをりこそあれ。あはれなるわざなりけり。中将の、さらに

昔ざまのにほひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思

ふに、かかる人もものしたまうけるよ」とて涙ぐみたまへ

り。③箱の蓋なる御くだものの中に、橘のあるをまさぐりて、

源氏「④橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおも

ほへぬかな

世ととももの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎ

つる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ

思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」とて、

御手をとらへたまへれば、⑤女かやうにもならひたまはざり

つるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてもの

したまふ。

①いとかうしもおぼえたまはず
それほどこうも（母夕顔に）似ているとも思わなかった

②中将の、さらに昔ざまのにほひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もものしたまうけるよ
夕霧が亡き母（葵上）の美貌にまるで似ていないのに見慣れて、（親子でも）そうも似ないものと思っていたのにこんなにも親によく似た人がいたとは。

③箱の蓋なる御くだもの
箱代わりの蓋に載っている果物

④橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおもほへぬかな
『古今集』五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」による

⑤女 玉鬘

玉鬘 袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりも

こそすれ

むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつ

かしう、手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり肌つきの

こまやかにうつくしげなるに、^⑥なかなかなるもの思ひ添ふ

心地したまうて、今日はすこし思ふこと聞こえ知らせたま

ひける。女は心憂く、いかにせむとおぼえて、^⑦わななかる

る気色もしるけれど、^{源氏}「何か、かく疎ましとは思いたる。

いとよくもて隠して、人に咎めらるべくもあらぬ心のほど

ぞ。さりげなくてをもて隠したまへ。浅くも思ひきこえさせ

ぬ心ざしに、また添ふべければ、

世にたぐひあるまじき心地なんするを。^⑧このおとづれきこ

ゆる人々には、思しおとすべくやはある。いとかう深き心あ

る人は世にありがたかるべきわざなれば、うしろめたくの

みこそ」とのたまふ。いとさかしらなる御親心なりかし。

^⑥なかなかなるもの思ひ添ふ心地したまうて 恋心を訴えて返って物思いがまさる心地がしなさって

^⑦わななかるる気色もしるけれど 震えている気配は明らかだが

^⑧このおとづれきこゆる人々には、思しおとすべくやはある 懸想文を寄せる求婚者たちより、（真心を抱くこの私を）軽くお考えになつてよいものではないか

一、^{18p}源氏の「橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおもほへぬかな」の歌と、それに対する^{19p}玉鬘の「袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ」の歌を、もととった『古今集』の歌を踏まえながら現代語訳してみよう。

二、源氏から恋情を訴えられた玉鬘の反応を整理してみよう。

三、^{19p}「いとさかしらなる御親心なりかし」は語り手の評言（草子地）です。語り手は源氏のどのような点を「いとさかしらなる御親心」だと評しているのだろうか。

〈コラム〉旧懷から懸想へ

源氏がかつての恋人夕顔を偲び懷かしむ体から、そのままその娘である玉鬘への恋の思いへと話題をすり替える形で玉鬘に恋心を訴えかけました。実は源氏はこれより以前に、梅壺女御（六条御息所の遺児。今は源氏が引き取り養女として世話をしている）にも似たような方法で自身の恋心をほのめかしていました。

このように故人を偲ぶ体が懸想の言葉へとすり替わってゆき、恋愛へと発展していく方法はなにも『源氏物語』独自の方法というわけではありません。「夢よりもはかなき世の中を：」の書き出しで有名な『和泉式部日記』にも同様の趣向が見られます。夫の為尊親王を亡くした和泉式部のもとに、為尊親王の弟である敦道親王から手紙が送られてきます。初めは亡き為尊親王を偲ぶ内容のやり取りでしたが、このやり取りが徐々に恋愛へと反転していききました。

この二人のやり取りの中にも、キーワードとして「橘」が登場します。「橘」とはどのような意味を持つ果物だったのでしょうか。

玉鬘は、表向きは実の父を装いながら一方で恋心を訴えてくる源氏の行動に玉鬘の苦悩は募る一方である。当の源氏は自身が玉鬘に恋心を抱いていることに戸惑いながらも、日々玉鬘に送られてくる様々な男性からの懸想文を見ては、その身分に応じて適切な返事を送るよう玉鬘に促すのであった。源氏自身も、養父の立場でありながら養女である玉鬘に恋心を抱いてしまう自分の矛盾した思いに苦しんでいた。いっそのこと玉鬘をしかるべき男性と結婚させてしまった方が、自分自身も苦しまず、玉鬘にとっても幸せなのではないかと考えながらも、玉鬘の美しさに惹かれて源氏はなかなか結論が出せずにいた。

ある夏の夜、求婚者の一人である兵部卿宮が玉鬘のもとを訪れ、几帳越しで玉鬘にあれやこれやと恋の訴えをするが、玉鬘はそれに返答もしない。その様子を物陰から隠れて見ていた源氏は、兵部卿宮に玉鬘の姿を見せて心を惑わしてやろうと考え、こっそりと近寄る。

① 何くれと言長き御答へ聞こえたまふこともなく思しや

すらふに、寄りたまひて、御几帳の②帷子を一重うちかけた

まふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあ

きれたり。螢を薄き③かたに、この夕つ方いと多くつつみお

きて、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかく

ひきつくるふやうにて。にはかにかく④掲焉に光れるに、あ

さましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目いとをかし

げなり。

(中略)

⑤ 宮は、人のおはするほど、さばかりと推しはかりたまふ

が、すこしけ近きけはひするに、御心ときめきせられ

たまひて、⑥えならぬ羅の帷子の隙より見入れたまへるに、

一間ばかり隔てたる見わたしに、かくおぼえなき光の

① 何くれと言長き御答へ聞こえたまふこともなく (玉鬘は)

兵部卿宮の長々と続く言葉への返事を申し上げることもな

く
② 帷子 几帳などにかけて隔てとして用いた布

③ かた 帷子と同じ

④ 掲焉に はっきりとわかるように

⑤ 宮は、人のおはするほど、さばかりと推しはかりたまふが兵部卿宮は、玉鬘がいらつしやる場所はそのあたりかと検討をつけておられたのに

⑥ えならぬ なんととも言えない美しさの

うちほのめくををかしと見たまふ。ほどもなく紛らわして
隠しつ。されどほのかなる光、艶なることのつまにもしつべ
く見ゆ。ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体の
をかしかりつるを飽かず思して、^⑦げにこのこと御心にしみに
けり。

⑦げにこのこと御心にしみにけり
いかにも源氏の思惑通り、
兵部卿宮は玉鬘の姿にお心を奪
われてしまったのであった

兵部卿宮 「なく声もきこえぬ虫の思ひだに人の消つにはき

ゆるものかは

思ひ知りたまひぬや」と聞こえたまふ。^⑧かやうの御返しを、
思ひまはさむもねぢたければ、疾きばかりをぞ、

玉鬘 声はせで身をのみこがす蜚こそいふよりまさる思ひ

なるらめ

⑧かやうの御返しを、思ひまは
さむもねぢたければ、疾きばかりをぞ
こうした折のお返事を
あれこれ思案するのも素直でない
ので、早速にというのだけ
をとりえに

など、はかなく聞こえなして、御みづからはひき入りたまひ
にければ、いとはるかにもてなしたまふ愁はしさを、いみじ
く恨みきこえたまふ。

学習のてびき

一、この巻はなぜ蜚巻という巻名なのだろうか。その理由を考えよう。
二、兵部卿宮と玉鬘の和歌の贈答を中心に、それぞれの相手に対する思いを考えてみよう。
三、^{22p}「ほのかなる光、艶なることのつまにもしつべく見ゆ」は草子地で、「ほのかな光（に
照らされた玉鬘の姿）は、優美なことのきっかけになってしまいうにも見えた」という意味
です。「優美なこと」とは具体的に何を指しているのでしょうか。考えてみよう。

大原野の行幸——行幸巻——

相変わらず源氏から懸想を受け続けることを玉鬘は苦しく思いながらも、一方では口で恋心を訴える以上のことをしない源氏に玉鬘は徐々に心を許しはじめ、源氏と玉鬘の仲も少しずつ打ち解けてきた。源氏はこのまま玉鬘との関係が実は親子ではなかったことを公表し、玉鬘を実父である内大臣のもとに返すことで正式に妻にしようと考えた。しかし源氏にはすでに正妻格の紫の上があり、どれほど玉鬘を愛したとしても、紫の上への愛には到底及ばないことは源氏自身気づいており、玉鬘との結婚をためらう。兵部卿宮のような貴族の正妻となる方が玉鬘にとっては幸せなのではないかと考えるも、かといって玉鬘への愛情を捨てられることもできず、源氏と玉鬘は、表向きは実の親子、実際は養父と養女でありながら、源氏が玉鬘に懸想するという奇妙な関係が続いていた。

ある時、玉鬘の噂を聞いた冷泉帝から、玉鬘を尚侍（内侍司の長官）として宮中に出仕させないかとの依頼が源氏に入った。源氏は、玉鬘を尚侍として宮中に出仕させて帝の寵愛を受けさせることで玉鬘を男女の関係に慣れさせ、しかるべき折に自邸（六条院）に引き取って愛人として玉鬘と関係を持つようかと考えた。

十二月、冷泉帝の大原野の行幸が行われることになった。そこには源氏や内大臣をはじめとする多くの貴公子も参列している。玉鬘は大原野の行幸を見物に出かけ、そこで冷泉帝や実父内大臣の姿を初めて目にすることとなる。

①西の対の姫君も立ち出でたまへり。②そこばくいどみ尽く

したまへる人の容貌ありさま見たまふに、帝の、赤色の御衣おんぞ

奉りてうるはしう動きなき御かたはら目に、なずらひきこゆ

べき人なし。③わが父大臣を、人知れず目をつけたてまつり

たまへど、きらきらしうものきよげに盛りにしたものしたまへ

ど、限りありかし。いと人にすぐれたる④ただ人と見えて、

⑤御輿うちの中よりほかに、目移るべくもあらず。まして、容貌

ありや、をかしやなど、若き⑥御達の消えかへり心移す⑦中少

将、何くれの殿上人やうの人は、何にもあらず⑧消えわたれ

るは、さらにたぐひなうおはしますなりけり。

①西の対の姫君 玉鬘

②そこばくいどみ尽くしたまへる人 競って綺麗を尽くしておられる大勢の人々

③わが父大臣 内大臣。玉鬘の実父

④ただ人 人臣

⑤御輿うちの中 御輿の中には冷泉帝がいる

⑥御達 女房達

⑦中少将 中将や少将

⑧消えわたれる 物の数にも入らない

源氏の大臣の御顔ぎまは、^⑨別物^{ことも}とも見えたまはぬを、思ひなしのいますこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。さは、かかるたぐひはおはしがたかりけり。あてなる人は、みなものきよげにけはひことなべいものとのみ、^⑩大臣、中将などの御にほひに目馴れたまへるを、^⑪出で消えどものかたはなるにやあらむ、同じ目鼻とも見えす、口惜しうぞ^お圧されたるや。兵部卿宮もおはす。^⑫右大将の、さばかり重りかによしめくも、今日の装ひいとなまめきて、^⑬胡^{やなぐひ}籙など負ひて仕うまつりたまへり、色黒く髭がちに見えて、いと心づきなし。いかでかはつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ、いとわりなきことを、^⑭若き御心地には見おとしたまうてけり。^⑮大臣の君の思しよりてのたまふことを、いかがはあらむ、宮仕は心にもあらで見苦しきありさまにや、と思ひつみたまふを、^⑯馴れ馴れしき筋などをばもて離れて、^⑰おほかたに仕うまつり御覽ぜられんは、をかしうもありなむかしと思ひよりたまうける。

⑨ 別物とも見えたまはぬ 帝と別人とも思われない。冷泉帝は源氏の子。表向きには源氏の弟ということになっている

⑩ 大臣、中将 源氏と夕霧。

⑪ 出で消えどものかたはなるにやあらむ 帝の前に出ては見劣りしてしまうせい

⑫ 右大将 髭黒大将。玉鬘の求婚者の一人

⑬ 胡籙 矢を入れて背中に負う武器

⑭ 若き御心地には 若い玉鬘の心には

⑮ 大臣の君の思しよりてのたまふこと 源氏の、玉鬘に尚侍として宮仕えさせたいとする心づもり

⑯ 馴れ馴れしき筋 帝の寵愛を受けるという方面のこと

⑰ おほかたに ただ（女官として）普通に

学習のてびき

- 一、この場面は誰の視点から語られているのだろうか。
- 二、冷泉帝、内大臣、源氏、髭黒の様子はそれぞれどのように書かれていますか。
- 三、尚侍出仕に対する玉鬘の思いはどう変化したのだろうか。その理由とともに考えてみよう。

語句と文法

24p 「けはひことなべいもの」をもとの形に直し、文法的に説明しよう。

玉鬘尚侍出仕の準備を進める源氏は、このタイミングで玉鬘の実父内大臣に玉鬘のことを打ち明ける決心をする。出仕にあたって玉鬘の出自を偽るわけにもいかないため、源氏は玉鬘の裳着（女性の成人式）を挙行することを決意し、その腰結役を内大臣に頼むこととした。初めは腰結役を断っていた内大臣であったが、源氏が玉鬘のことを打ち明けたことをきっかけに内大臣は了承し、裳着の日、ついに玉鬘と内大臣親子は再会を果たした。

親子の再開は果たしたものの、そのまま世間に玉鬘の出自をすぐ公表し、世間の人々から源氏と玉鬘に男女関係があったのではないかと邪推されることを恐れた源氏は、ひとまず親子関係を偽り続け、内大臣にも口止めをした。玉鬘を養育してもらった恩から内大臣は素直に源氏に従いつつも、源氏が玉鬘に恋心を抱いていることを直感で見抜いていた。

玉鬘の尚侍出仕は来年の十月に決まった。玉鬘は、尚侍として出仕してもし帝の寵愛を受けることになっては他の後宮から嫉妬を受ける可能性があるし、かといって出仕しなければ源氏からの懸想を受け続けることになってしまう、と自身の身の振り方を案ずる。実父内大臣は源氏に遠慮して玉鬘の身の振り方に口出しすることはなく、源氏は内大臣に事の真相を明かして以来、憚ることなく玉鬘に懸想する。玉鬘にはまともな相談相手がいない、苦悩は積もる一方である。

玉鬘出仕の噂を聞いた男たちは、出仕前になんとかして玉鬘をものにしようと必死に手紙を送る。数々の求婚者からの手紙のうち玉鬘は兵部卿宮にのみ返事をし、わずかな恋心を見せるのであった。

しかし、玉鬘を手中に収めたのは意外なことに髭黒であった。二人の仲を取り持ったのはどうやら弁のおもという玉鬘の女房らしい。玉鬘はまったく髭黒に打ち解ける気配もなく、ただ自身の身の上を嘆くばかりである。源氏も不本意で残念なことと思う一方、不満な様子を髭黒に見せるのも気の毒だと考えてこらえる。髭黒は玉鬘を自邸に引き取り、玉鬘の尚侍出仕は自宅勤務という形になった。髭黒には正妻がいたが、あまりにも玉鬘を愛する夫の様子に激しく嫉妬し、子ども達を連れて実家へと帰ってしまった。

源氏は玉鬘を忘れかね、数回消息を送る。玉鬘も今となって源氏の思いやりが身に沁み、源氏を恋しく思うのであった。

髭黒と元正妻の子どものうち、男子は髭黒が引き取ることとなった。男子たちは玉鬘になつき、元正妻のもとに引き取られた女子たちは、玉鬘と親しい男子たちをうらやましく思う。髭黒との間に男の子も生まれた。しかしもはや玉鬘の心の内は物語には語られない。玉鬘はあらゆる思いをわが胸一つの中に封じ込め、今は髭黒家の良妻賢母として生きる道を歩み始めたのだった。

〈コラム〉玉鬘十帖で四季を味わう

玉鬘十帖のうち初音巻は行幸巻は正月から十二月までの一年の四季の移ろいと共に進行してゆきます。そのため、玉鬘十帖には美しい四季の情景描写が多くなされています。原文を通して『源氏物語』の季節表現の美しさを味わいましょう。

〈初春〉初音巻

年たちかへる朝の空のけしき、なごりなく曇らぬうらけさには、数ならぬ垣根の内だに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかに見ゆるぞかし。ましていとど玉を敷ける御前は、庭よりはじめ見どころ多く、磨きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。

（年の改まった元日の朝の空の景色は一片の曇りもない麗らかさなので、大した身分のない者の垣根の内さえ、雪の消え間からのぞく初草が若々しく緑色を見せ始め、早くも春めく霞が立ち、木の芽もほんのりと萌え出て、自然に人の気持ちまでのびのびしてくるかのように見えることだ。ましてや源氏の大臣の宝石を敷き詰めたかのような素晴らしい御殿は、庭を初めてとして見どころが多く、一段と飾り立てていらつしやる女房達のお住まいは、言い表そうにも言葉が足りないほどである。）

〈晩春〉胡蝶巻

三月の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くしてにはふ花の色、鳥の声、他の里には、まだ古りぬにやとめづらいう見え聞こゆ。

（三月二十日過ぎの頃、春の御殿の御庭の様子はいつもに増してことのほかに美しく、照り映える花の色といい、鳥の声といい、他の町の方々には、あちらだけはまだいつまでも春の盛りなのだろうかと不思議に見えたり聞こえたりする。）

〈盛夏〉常夏巻

いと暑き日、東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ。中将の君もさぶらひたまふ。親しき殿上人などあまたさぶらひて、西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調じてまゐらす。例の、大殿の君達、中将のあたり尋ねて参りたまへり。源氏「さうざうしくねぶたかりつる。をりよくものしたまへるかな」とて、大御酒まゐり、氷水召して、水飯などとりどりにさうどきつつ食ふ。

（まったく暑くてならぬ日に、源氏は東の釣殿にお出ましになって涼みなさる。夕霧もおそばにいらつしやる。親しく出入りしている殿上人が大勢仕え、西川から差し上げた鮎や、近くの川の石伏といったものを、源氏の御前で調理してさしあげなさる。いつものように、内大臣のご息たちが夕霧を尋ねてこちらに参上しておられる。源氏は「退屈して眠たくなっていたよころだ。ちようどよいところへ来てくれた」とおっしゃって、お酒を召し上がったリ、氷水をお飲みになったりして、水飯などをそれぞれにぎやかに食べている。）

〈初秋〉 篝火卷

秋になりぬ。[※]初風涼しく吹き出でて、背子が衣うらさびしき心地したまふに、しのびかねつつ、いとしばしば渡りたまひて、おはしまし暮らし、御琴なども習はしきこえたまふ。五六日の夕月夜はとく入りて、すこし雲隠るるけしき、^{※※}荻の音もやうやうあはれなるほどになりけり。

※「わがせこが衣のすそを吹き返しうらめづらしき秋の初風」(古今・秋上・詠み人知らず)

※「秋の日のあやしきほどの夕暮に荻吹く風の音ぞ聞こゆる」(斎宮女御集)

※「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風荻の下露」(義孝集、和漢朗詠集)

(秋になった。初風が涼しく吹きはじめ、源氏は「背子が衣の」と心寂しいお気持ちになれるので、こらえきれなくなって、まことに足しげく玉鬘のもとにお越しになって、一日中お過ごしになり、お琴などを教え申し上げなさる。五、六日ごろの夕日は早くから西に沈み、空にはうっすらと雲がかかっている風情や、それに荻の葉風の音も、おいおい身にしみる頃になっ

単元のまとめ

一、四十歳になった玉鬘の様子が竹河巻にも描かれている。竹河巻を読み、玉鬘のその後がどうなったのか、見てみよう。

二、玉鬘十帖の結末は玉鬘にとって幸せなものだったのだろうか。自分の意見をまとめ、クラスで共有し合おう。

三、玉鬘十帖の内容を整理し、グループに分かれて源氏、玉鬘、内大臣、髭黒、兵部卿宮それぞれの視点から玉鬘の物語を語り直し、スライドやポスターにまとめて発表し合おう。

四、玉鬘の生き方をさらに深く味わいたいと思った人は、玉鬘十帖を全文読んでみましょう。

終章 おわりに

本研究では『源氏物語』のうち玉鬘十帖に絞り、一つのストーリーとして玉鬘十帖を味わうことのできるような教材の作成を試みた。また、『源氏物語』内にとどまらず他の平安朝文学作品と結びつけながら、一つの作品に閉じることのない、広い視野をもつ教材を目指した。

従来の教科書における『源氏物語』の扱いは、重要場面をダイジェスト形式で扱いながらその間を概括的に結び付け、全体の流れがおおまかにつかめるような形となっていた。しかしこの形式では結局『源氏物語』の内容を断片的に扱っているにすぎず、長編小説である源氏物語をストーリーとして味わうことは難しい。本研究では扱う範囲を玉鬘十帖に限定し、玉鬘の半生を追うことができる教材を作成できたと考えている。

日本文学の名作として、教科所にも掲載され続けてきた『源氏物語』であるが、教科書での扱いとしてはこれまでは断片的な場面を読みながらおおまかな内容をつかむにとどまっていた。今後はよりテーマ性を持った教材を作成していく必要があるのではないだろうか。本教材は玉鬘の半生を追うというテーマのもと教材を作成したが、このように一つのテーマをもとに作成された教材が今後さらに増えていけば、生徒の興味関心に合わせて教材を組み合わせて一つの単元を作ることができるだろう。テーマを絞って教材を作成すれば、従来の教材よりも作品をより深く掘り下げることができ、探究的な学習に繋がると考えている。本研究ではそのような教材の一例を示すことができた。時間の都合上、本教材を用いた実践を行うことはできていないため、本教材を使用した単元計画を立て、実践を通して本教材を改良し、新たな古典文学教材の在り方をこれから追及していきたい。

参考文献一覧

- 一 『高等学校 標準古典 A 物語選』第一学習社 平成二十六年二月
- 二 『高等学校 古典 B 古文編』第一学習社 平成二十六年二月
- 三 『古典 B 古文編』大修館書店 平成二十六年四月
- 四 『精選 古典 B 古文編』明治書院 平成二十六年一月
- 五 『古典 B 古文編』筑摩書房 平成二十六年一月
- 六 『古典 B 古文編』数研出版 平成二十六年一月
- 七 『精選古典 B 古文編』東京書籍 平成二十六年二月
- 八 『新編古典』右文書院 平成二十六年四月
- 九 『古典 B』桐原書店 平成二十六年二月
- 十 『源氏物語・大鏡・評論』文英堂 平成二十九年四月
- 十一 『新編日本古典文学全集 源氏物語③』小学館 平成八年一月